

一般口演 | 標準化

## 一般口演6 標準化

2021年11月19日(金) 16:30 ～ 17:45 D会場 (2号館1階212)

### [2-D-1-03] 国際生活機能分類（ICF）の活動と参加の区別に向けた一考察

\*三田 岳彦<sup>1</sup>（1. 川崎医療福祉大学 医療情報学科）

\*Takehiko Mita<sup>1</sup>（1. 川崎医療福祉大学 医療情報学科）

キーワード：ICF, Activity, Participation

【背景】国際生活機能分類（ICF）の構成要素のうち、活動と参加は単一のリストとして示されている。活動は「課題や行為の個人による遂行」、参加は「生活・人生場面への関わり」と定義されている。ICFの付録3において、活動と参加を分類・コード化する際に、両者を完全に区別～完全に重複までの範囲で4つの選択肢が提示されている。ICFは人間の健康を生物学的・社会的な視点から総合的に捉えるための概念枠組みと分類項目を提供している。しかし、分類概念の曖昧さや解釈の自由度などの再現性及び内容妥当性の問題から実用に至っているとは言い難い。特に、活動と参加のリストが単一であることがこの問題の主要な原因のひとつであると思われる。【目的】本研究ではICFの活動と参加の分類項目をICFで示されている定義に照らして再考し、活動と参加の区別に向けた示唆を得ることを目的とした。【方法】対象は活動と参加のリストのうち、第2レベルまでの81項目とした（「その他特定」と「詳細不明」が含まれる項目は除く）。各項目を活動と参加の定義に沿って、a: 活動のみ、p: 参加のみ、a or p: 両方に該当、のいずれかに分類し、分類頻度と割合を算出した。【結果】活動と分類されたのは35項目で、ここには学習、運動・移動、セルフケアに関する項目が含まれた。参加には9項目分類され、教育や職業に関する項目が含まれた。両方に該当が37項目と最も多かった。【考察】ICFでは上記の定義で示されるとおり、活動は個人、参加は社会という視点で捉えることが可能である。本研究でもこれらの視点に立って分類を試みた。活動として分類された項目には個人の能力に起因されるものが多い。一方で参加は他者及び制度などの社会的要因が含まれる項目であった。言い換えれば環境因子の存在が項目名及び内容から判断できる場合はa or pに分類されるため、更なる概念整理が必要となると思われる。

# 国際生活機能分類(ICF)の活動と参加の区別に向けた一考察

三田 岳彦<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> 川崎医療福祉大学 医療情報学科

## Distinguishing between Activities and Participation in the ICF

Takehiko Mita<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Department of Health Informatics, Kawasaki University of Medical Welfare

The ICF provides a conceptual framework and classification items for a comprehensive view of health from a bio-psycho-social point of view. However, it has not been put into practical use due to the ambiguity of the classification concept, the reproducibility, and the problem of content validity. In particular, the conceptually distinct activities and participation are single in the classification list, which seems to be one of the main causes of this problem. The purpose of this study is to reconsider the classification items of ICF activities and participation using existing definitions, operational options, and the concepts of "ability" and "performance", and to distinguish between activities and participation. It was confirmed that there are items that correspond to both activities and participation, and it is difficult to make a clear distinction. The results show an attempt at a new classification procedure that distinguishes between activity and participation in the ICF.

**Keywords:** ICF, Activity, Participation

### 1. 結論

国際生活機能分類(ICF)<sup>1)</sup>は人間の健康を生物・心理・社会的な観点から総合的に捉えるための概念枠組み(図1)と分類項目を提供している。すなわち、人の健康を多面的かつ構造的に捉えることで、病気や障害が本人の問題によるものか、環境によるものか、または、これらが複合的に影響しているかを検討するために役立つと考えられている<sup>2)</sup>。

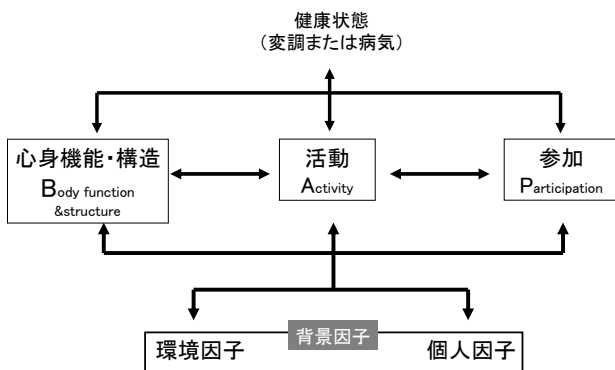


図1 ICF の概念枠組み (各構成要素間の相互作用)

しかし、分類概念の曖昧さや解釈の自由度などの再現性及び内容妥当性の問題から分類法として実用に至っていないと言われている。特に、概念上(図1)では区別されている活動と参加は、分類リストとしては単一であり、このことが上記の問題の主要な原因のひとつであると思われる<sup>3)</sup>。

ICF の構成要素のうち、活動は「課題や行為の個人による遂行」、参加は「生活・人生場面への関わり」とそれぞれ定義されている。ICF の付録3において、活動と参加を分類・コード化する際に、両者を完全に区別(重複なし)～完全に重複までの範囲で4つの選択肢が提示されている<sup>1)</sup>。加えて、活動と参加を評価するための概念として、「能力」と「実行状況」が設定されている。「能力」は、課題や行為をする個人の能力

を表し、画一的・標準的な環境において評価されるものであり、環境によって調整された個人の能力を反映する。一方、「実行状況」は、生活・人生場面への関わり、あるいは、生活経験として理解される。

すなわち、活動と参加の区別における曖昧さを解消するために、画一的・標準的な環境を設定できる項目を「活動」、画一的・標準的な環境を設定できない(設定することが難しい、または、設定することに意味がない)項目を「参加」と位置づけ、再検討することが有意義であると考えられる。

### 2. 目的

本研究はICFの活動と参加の分類項目を上記の定義、選択肢ならびに「能力」と「実行状況」の概念を用いて再考、分類を試み、その分類結果の特徴からあらたな活動と参加の区別に向けた示唆を得ることを目的とした。

### 3. 方法

#### 3.1 対象

ICFの活動と参加の9領域に含まれる第2レベルまでの項目(合計81項目)とした(「その他特定」と「詳細不明」が含まれる項目は除く)。

#### 3.2 手順

図2に分類手順のイメージを示す。各項目をICFの活動と参加の定義および、付録3に示される選択肢に沿って、活動のみ、参加のみ、両方に該当、のいずれかに分類する。さらに、両方に該当と分類された項目については、画一的・標準的な環境を設定できる項目を「活動」、画一的・標準的な環境を設定できない項目を「参加」に再分類し、それぞれ分類頻度を算出した。

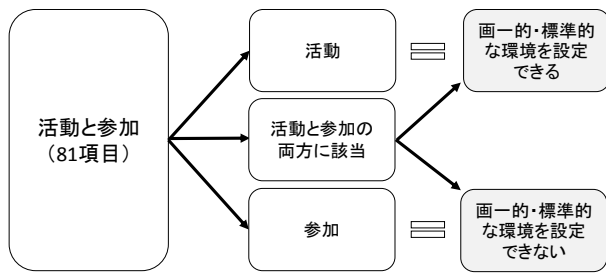


図2 分類手順

## 4. 結果

表1に分類結果をしめす。

81項目のうち、「活動のみ」と分類されたのは41項目であった。とくに「学習と知識の応用」の割合が高く、つぎに「コミュニケーション」、「運動・移動」、「セルフケア」が多かった。

「参加のみ」と分類されたのは14項目で、その内訳は「主要な生活領域」の9項目、「コミュニティライフ・社会生活・市民生活」の5項目であった。

「両方に該当」と分類されたのは26項目で、「対人関係」、「家庭生活」、「運動・移動」の順で割合が高かった。この26項目を「画一的・標準的な環境を設定できるか否か」で再分類(グレーの編みかけ部分)した結果、「環境を設定できる」=活動が、「運動・移動」と「家庭生活」の併せて6項目であった。

表1 活動と参加の項目と分類結果

| 領域 (項目数)                   | 活動のみ | 参加のみ | 両方に該当 | 環境設定可 | 環境設定不可 |
|----------------------------|------|------|-------|-------|--------|
| 1. 学習と知識の応用 (15)           | 15   | 0    | 0     | —     | —      |
| 2. 一般的な課題と要求 (4)           | 1    | 0    | 3     | —     | —      |
| 3. コミュニケーション (11)          | 9    | 0    | 2     | —     | 2      |
| 4. 運動・移動 (14)              | 9    | 0    | 5     | 3     | 2      |
| 5. セルフケア (7)               | 7    | 0    | 0     | —     | —      |
| 6. 家庭生活 (6)                | 0    | 0    | 6     | 3     | 3      |
| 7. 対人関係 (7)                | 0    | 0    | 7     | —     | 7      |
| 8. 主要な生活領域 (12)            | 0    | 9    | 3     | —     | 3      |
| 9. コミュニティライフ・社会生活・市民生活 (5) | 0    | 5    | 0     | —     | —      |

## 5 考察

ICFの活動と参加の定義によると、活動は個人、参加は社会という視点で捉えることができる。本研究ではまず、これらの視点に立って分類を試みた。活動として分類された項目には読むこと、書くこと、計算することなど、明確に個人の能力が反映されるものが多かった。一方、参加は教育や職業など他者及び社会制度など、社会的要因(環境因子)への関わりが含まれる項目であった。しかし、対人関係のように個人の能力と他者と関わりの両方の側面をもつ領域は、活動と参加の両方に分類されるため、更なる概念整理が必要となる。

そこで本研究では「能力」と「実行状況」の概念を導入した。

本来、この2つの概念はICFにおいて、活動と参加の項目を評価するために位置づけられてきたものである。しかし、本研究では、この概念の「画一的・標準的な環境を設定できるかどうか」に着目し、改めて活動と参加の区別に応用した。画一的・標準的な環境とは、病院の検査室やリハビリテーションルームなどで人工的・実験的に設定できるような環境を想定した。たとえば、調理や家事は社会的役割として参加にも位置づけられるが、上記の画一的・標準的な環境が設定できる(たとえば病院内で再現可能)と判断されれば活動に分類されるべきだと考える。対人関係や主要な生活領域の項目のほとんど(教育や職業)は画一的・標準的な環境が設定できないため、参加に位置づけられると考える。

## 6 結論

本研究ではICFの活動と参加の分類項目を活動と参加のそれぞれ定義、選択肢を用いて分類した。その結果、活動と参加の双方に該当する項目が明らかとなり、明確な区別が困難であることを確認した。これらの解決を試みるために、さらに「能力」と「実行状況」の概念を用いて分類を再考した。その結果、標準的な環境が設定できる項目は活動(能力)と判別し、そうでない項目は参加と位置づけた。本研究はICFにおける活動と参加を区別する、新たな分類手順の試みを提示した。

今後は本研究で示した分類手順と結果の再現性を臨床家らの協力を得て確認するとともに、コンピュータでの処理を可能とするアルゴリズムの開発を目指したい。

## 参考文献

- 1) 世界保健機関(WHO). 国際生活機能分類(ICF). WHO 2001.
- 2) 三田岳彦, 三上史哲, 堀野宏樹ら. 肢体不自由児施設入所者の余暇活動時における生活機能と環境因子の評価. 川崎医療福祉学会誌 2010; 19(2): 339-46.
- 3) Mita T, Mikami F, Okada M. Compatibility between independent activities in the course of study for schools for special needs education and ICF categories. Kawasaki Journal of Medical Welfare 2012; 17(2): 88-95.

## 謝辞

本研究は、川崎医療福祉大学 平成30年度(2018年度)医療福祉研究費(代表研究者:三田岳彦)、ならびに、令和2年度(2020年度)三菱財団社会福祉事業・研究助成(代表研究者:三田岳彦)の助成を得て実施した。